

赤れんが

第17号

- 看護局の取組み
- 特集「臨床研修」
- トピックス
- 診療案内他

<理念>

質の高い医療を提供し、患者の生命と健康を守ります

<基本方針>

- 1 私たちは、急性期の高度医療と救急医療を提供します
- 2 私たちは、研修・研鑽に励み、患者に信頼される医療を提供します
- 3 私たちは、他の医療機関との連携を強化し、地域医療の向上に努めます
- 4 私たちは、地域に期待される医療従事者を育成します
- 5 私たちは、健全な経営基盤の確立を目指します

<急性期病院の役割>

当院は、地域の急性期の患者様を診療させていただく役割があります。急性期の専門的治療が終わり、病状が安定された方は、担当の医師が判断し、責任を持ってお近くの診療所、かかりつけの医へご紹介いたします。日頃の治療や健康状態を見守る大切な診療所と連携を取り合いますので、ご安心ください。急性期の患者様が一人でも多く外来受診できますように、どうぞ、ご理解とご協力をお願いいたします。



耐震工事完成予想図 ※トピックス参照

「看護局の取り組みについて」

看護局長 松本美智子

この4月、看護局は48名のフレッシュな仲間を迎え、総勢459名になりました。これは、中央病院の職員数の6割以上を占め、一昔前では到底考えられないような人数になりました。2006年に、7対1入院基本料が創設されてから、4年が経過し、当院でもようやくこの体制が取得できる人数が確保できました。7対1入院基本料は、より手厚い看護体制を評価されるもので、質の高い、安全な医療の提供を目指すためのものです。

質の高い看護を提供するためのポイントは、何と云っても人材育成にあります。今年度、看護局では、新人看護職員研修の充実と、クリニカルラダーシステムを導入します。新人看護職員研修では、OJTの強化を図り、各部署に新人看護職員教育担当者をはじめとする「わかばサポートチーム」を設置し、部署全体で新人看護職員を育成する体制を整えました。また、新

人看護職員研修には、他院の新人の受け入れも行っています。

クリニカルラダーシステムは、「新人」「一人前」「中堅」「達人」の4段階を踏んで、臨床看護実践能力を育成するシステムです。看護師の臨床実践能力を評価し、動機付けと仕事の満足度を高め、看護師個々のキャリア開発に役立てるためのものです。

安全・安心な医療の提供、医療の質が問われる時代、看護職に期待されるものも非常に大きくなっています。当院の使命を果し、質の高い看護をどのように提供していくのか、人材育成をどのように図っていくのかは、看護局の大きな課題です。



「臨床研修支援室の取り組み」

臨床研修支援室長 内田 博

■若葉マークでも研修医は医師

研修医は医師国家試験に合格した医師です。ただし経験が浅い医師です。どの会社(組織、社会)でもはじめは誰でも初心者です。仕事を通じていかに初心者を教育するか、教育しながらいかに「よい仕事」をしてもらうかが、会社の力量です。医療の現場でも同じです。県民の健康を守るという使命において私たちは研修医とともに「よい仕事」をしなければなりません。

■よい仕事をする仕組み

そのためには研修医がめざすゴール(目標)を示します。ゴールに向かう研修医が道に迷わないように、足を踏みはずさないように手助けします。「研修プログラム」では、二年間の卒業研修の中で達成すべきゴールを示します。「臨床研修マニュアル」では、安全な医療を行いながらゴールへ導く仕組みを示します。一般に卒業研修病院では研修医・指導医によるチェック機構が強化されます。そのため、より安全で質の高い医療が提供されると言われています。

■よい評価が人を集める

良い研修に努めてきたところで一つの審査を受けました。卒業臨床研修評価機構という第三者による審査です。山陰で初めての合格です。中国地方でも二番目です。合格の知らせに一番驚いたのは当院の職員です。「自分

たちの卒業臨床研修はこんなに良いのだ」と再認識しました。また、医学部の学生も注目し、当院の臨床研修希望者が増えました。今春からの研修医は当院過去最多十名です。研修医が増えればますます病院が活気づきます。昨年末、臨床研修支援室は仕事納め式で知事表彰を受けました。「臨床研修プログラムの充実および研修医確保の取り組み」に対する表彰です。ますます土気が上がります。

■人が育つところに人が集まる

病院から医師が去る時代といわれています。ところが幸いにも、当院は人が集まる病院になっています。その理由は何でしょうか。安全で質の高い医療を提供するのはもちろんです。当院には「人」を育てるという精神が基幹にあるからだと私は考えています。各部署で「人」が着実に育っています。それぞれの職員が医療という仕事に対して、自信と責任を持ち、やりがいを感じています。これが理由の一つではないでしょうか。

これからも、医療そのものに加え、医療を行う「人」を提供できる病院の一員でありたいと思います。今後とも医師育成にご理解とご協力をお願いいたします。

新しい制度に対応した臨床研修支援室の取り組みを紹介します。

特集 臨床研修

卒業研修一年間の

ふり返りと今後の抱負

二年次研修医 米田尚弘

鳥取県立中央病院での卒業臨床研修も一年間が終了しました。目の前の患者さまに医療を展開してきたこの一年間は、机の上で知識を頭につめるだけの学生時代とは全く違ったものであり、毎日がとても新鮮でした。

医師になりまだ一、二カ月の頃は、採血や予防接種、風邪薬の処方すら一大イベントであり、緊張の連続であったことを覚えています。(もちろん、現在これらをおろそかにしているというわけではありません。)

一年間の研修を通して、徐々にではありますが自分でできることも増えてきて、それに連れ医師としての自覚も日に増してきたと感じます。また実際に患者さまと接することで、病気を知り治療を行うことに加えて、患者さまの声を聴き、願いを知ることの重要性を感じました。患者さまとのコミュニケーションは立派な医療の一部であるということを学びました。

一年間の研修を振り返ってみて、「ゆっくりにあるけれど着実に医師の階段を登ってきているのだな」ということを実感します。しかし、私たちはこれから数十年続く医師人生をスタートさせたばかりです。未来の鳥取県の医療は私たちが担っていくのだという自覚を持ち、残り一年間の研修を全力疾走していきたいと思えます。

臨床研修で学んだこと

元研修医 山下 尚寛

鳥取県立中央病院で二年間の卒業臨床研修を修了しました。ふり返ってみると、多くの病院スタッフがよい医療をするために一丸となって取り組んでいる姿勢が研修開始当初から輝いて見えました。先輩を見れば二年間しっかり中央病院で研修すれば実力がつくことがわかりました。後輩にもこの病院の素晴らしさを伝えました。仲間にも恵まれ、切磋琢磨しながら成長することができました。

診療面では、外来・病棟、数多くの手術、月四、五回の日当直を担当し、二年間で多くの知識や技術を身につけました。診療以外にも、学会発表や心肺蘇生法の資格取得をしました。

春からは整形外科医として新たな一歩を踏み出しますが、中央病院で得た経験や情熱を生かして、さらに力をつけていきたいと思っています。

